

庭園研究者・造園家森羅と建築家谷口吉郎：昭和前半期における建築家と造園家の交流

著者	田中 栄治
雑誌名	神戸山手大学紀要
号	18
ページ	59-87
発行年	2016-12-20
URL	http://id.nii.ac.jp/1084/00000630/

庭園研究者・造園家 森蘊と建築家 谷口吉郎

—— 昭和前半期における建築家と造園家の交流 ——

Garden researcher and landscape architect Mori Osamu and architect Taniguchi Yoshiro

—— The interchange of architect and landscape architect
in the first half of the Showa era ——

田 中 栄 治

キーワード：森蘊、谷口吉郎、建築家、造園家、交流

要 旨

本稿では庭園研究者・造園家の森蘊に着目し、建築家の谷口吉郎との関係を探った。昭和初期に森と谷口は東京工業大学において同時期にそれぞれの生涯の研究テーマの基礎を築いていった。終戦後、谷口は1950（昭和25）年に森の桂離宮研究の協力者となり、また1953（昭和28）年に森が東京工業大学に提出した学位請求論文の審査員のひとりであった。その後、谷口は森の研究協力者となった1950年以後に庭園に関する文章を多く発表するようになり、さらに1956（昭和31）年に著書『修学院離宮』をまとめる際に森のそれまでの研究から多くの知識を得たとしている。これらから、昭和前半期には森と谷口との間に研究面での交流があり、お互いに評価し、影響を与えていたことがわかった。

1. はじめに

大正期にさかんとなる生活改善のための建築家による住宅改造と、それに続く造園家による庭園改造を経て、住宅における建築と庭園の連繫、および建築家と造園家の連繫の重要性が指摘されるようになると、昭和初期には庭園に強い関心を持つ建築家が現れるようになる（田中 2012）。建築と庭園の結びつきをもとめた庭園研究者で造園家でもある森蘊によると、「昭和十年頃から後、殊に終戦後の庭園界の特色として、農林関係の出身者よりは建築家出身の設計家の進出が目立っている」（森 1960 p.129）として、堀口捨己・谷口吉郎・吉田五十八・坂倉準三・丹下健三・清家清の名前を挙げている。

前稿（田中 2015）では、森蘊と日本の伝統的な建築と庭園の研究から得た視点をもって住宅の設計をした建築家である堀口捨己・西澤文隆について、それぞれの著作などから昭和初期から戦後にかけての庭園研究者・造園家と建築家の関係を探った。

彼らの研究に共通しているのは建築と庭園を一体のものとしてとらえ、そのつながりを明らかにしようとした点にある。さらに、堀口の「生活構成の芸術」「家と庭の空間構成」、森の「日

本庭園の実用性」「純粹美術に近い先達の遺品」、西澤の「透ける空間」「伝統の合理主義」などの視点を持った研究は、大正期の庭園改造にみられた日本の伝統的な庭園を「観賞本位」とし、新しい時代の庭園として「実用本位」を求めるという単純な議論とは違い、また日本庭園の形式を安易に継承するものでもなく、日本の伝統的な建築と庭園の本質をつかみとることにより、新しい住宅における建築と庭園をつくり出すための創造的研究であった。

そして、昭和初期頃には建築家の庭園への関心は低かったのに対して、昭和10年頃から堀口、また戦後には西澤のように庭園に強い関心を持つ建築家が現れ、森と堀口・西澤には実作を通しての連繋はないものの、庭園研究者と建築家との間に研究の面での交流があり、お互いに評価し、影響を与えていたことがわかった。

本稿では、さらに森蘊と伝統的な建築と庭園について「清らかな意匠」という視点から考察を行った建築家である谷口吉郎との関係を探る。森は著書『桂離宮』（1955）において谷口から常に協力助言されたとし、谷口は著書『修学院離宮』（1956）において森の研究から多くの知識を得たとしている。二人の間にどのような交流があったのかを探るとともに、その背景として昭和初期の東京工業大学建築学科の状況を確認しておくこととする。

2. 森蘊と谷口吉郎

2-1. 森蘊

森蘊は1905（明治38）年8月8日に東京府立川村に生まれた。1932（昭和7）年3月に東京帝国大学農学部農学科を卒業し、同大学院に進学、1934（昭和9）年に修了した。この間、1933（昭和8）年5月に内務省衛生局事務取扱となり企画課に勤務し、1938（昭和13）年1月より厚生省体力局施設課事務取扱、同年3月には厚生技手となり体力局施設課に勤務し国立公園を担当した。1941（昭和16）年9月に東京市技手となり市民局公園課に勤務、1943（昭和18）年6月には東京市技師となり公園部技術課に勤務し、1944（昭和19）年1月に東京都井之頭恩賜公園自然文化園園長に就任した。1945（昭和20）年1月には海軍技師となり、ボルネオ民政部員として南ボルネオ地方の原始住居や農業園芸などの調査にあたった。1946（昭和21）年5月に復員、同年6月から東京都農事試験場に勤務した。1947（昭和22）年5月から東京植木株式会社に研究部長として勤めたのち、同年8月から国立博物館調査員となり、保存修理課で文化財保護に携わる。1949（昭和24）年6月に文部技官となり、1950（昭和25）年の文化財保護法成立により文化財保護委員会が設立され、修理課は同委員会の建造物課となった。1952（昭和27）年4月に奈良国立文化財研究所が新設されると、森は建造物研究室の初代室長に就任した。1953（昭和28）年12月に『桂離宮の研究』により東京工業大学から工学博士の学位を授与され、1960（昭和35）年5月に『中世庭園史の研究』により日本建築学会



図1 森蘊
（森蘊門下生一同 1989 口絵）

賞、1963（昭和38）年6月に奈良県文化賞を受賞している。1967（昭和42）年に奈良国立文化財研究所を退官したのちは京都市に庭園文化研究所を設立し、各地の歴史的庭園の発掘、復原を行うとともに、寺院や住宅などの庭園の設計も行なった。1970（昭和45）年3月に「桂離宮他日本庭園史に関する一連の研究」により日本造園学会賞、1974（昭和49）年11月に『庭ひとすじ』により毎日出版文化賞を受賞している。さらに、1975（昭和50）年11月に勲三等瑞宝章、1983（昭和58）年11月に和歌山市文化賞、1987（昭和62）年5月に日本造園学会上原敬二賞を受賞している。1988（昭和63）年12月14日に奈良県天理市で死去した。享年83歳。主な著書に『平安時代庭園の研究』（1945）、『日本の庭園』（1950）、『桂離宮』（1951）、『修学院離宮の復元的研究（奈良国立文化財研究所学報第2冊）』（1954）、『桂離宮』（1955）、『修学院離宮』（1955）、『中世庭園文化史（奈良国立文化財研究所学報第6冊）』（1959）、『日本の庭』（1960）、『寝殿造系庭園の立地的考察（奈良国立文化財研究所学報第13冊）』（1962）、『小堀遠州の作事（奈良国立文化財研究所学報第18冊）』（1966）、『奈良を測る』（1971）、『日本庭園史話』（1984）、『「作庭記」の世界』（1986）などがある。庭園研究とともに庭園設計にも携わり、各地に多くの庭園を残した。

2-2. 谷口吉郎

谷口吉郎は1904（明治37）年6月24日に石川県金沢市の九谷焼窯元の家生まれた。谷口は森蘊より1歳年上である。1928（昭和3）年に東京帝国大学工学部建築学科を卒業し、同大学院に進学した。大学時代は伊東忠太の指導を受け、卒業設計は製鉄所の計画案であった。大学院では佐野利器の指導により工場建築の研究を行った。1930（昭和5）年に東京工業大学講師となり、1931（昭和6）年に助教授となった。1938（昭和13）年10月には、伊東忠太のすすめにより日本大使館建設工事の技術交渉のため外務省囑託としてドイツに渡ったが、翌1939（昭和14）年9月にはドイツ軍のポーランド侵攻により第二次世界大戦が勃発したため急遽帰国した。1942（昭和17）年には「建築物の風圧に関する研究」により日本建築学会賞学術賞を受賞し、翌1943（昭和18）年に同研究により東京工業大学から工学博士の学位を授与され、同年に東京工業大学教授となった。戦後には、1949（昭和24）年に藤村記念堂その他により、また1956（昭和31）年には秩父セメント株式会社第二工場により、それぞれ日本建築学会賞作品賞を受賞した。その間、1952（昭和27）年には文化財専門審議会専門委員となる。1961（昭和36）年に東宮御所その他により日本芸術院賞を受賞し、翌年には日本芸術院会員となる。また、1961（昭和36）年には失われつつあった明治建築の保存について金沢の四高時代の同級生で当時名古屋鉄道副社長の土川元夫に相談を持ちかけ、それが1965（昭和40）年の博物館明治村の開館につながり、谷口は初代館長に就任した。同年に谷口は東京工業大学を定年退官して名誉教授となり、1967（昭和42）年に谷口吉郎建築設計事務所を設立し、同年に文化庁文化財保護審議会委員となった。この年に帝国劇場により第



図2 谷口吉郎
(谷口 1974 p.9)

九回建築業協会賞、1969（昭和44）年に名鉄バスターミナルにより中部建築賞、1973（昭和48）年には文化功労者となり文化勲章を受賞した。1979（昭和54）年2月2日に死去した。享年74歳。死後に従三位勲一等瑞宝章を追贈されている。主な設計建物に、東京工業大学水力実験室（1932）、自邸（1935）、慶應義塾幼稚舎校舎（1937）、慶應義塾大学予科日吉寄宿舍（1938）、藤村記念堂（1947）、慶應義塾大学第二研究室（万来舎 1951）、集団週末住居（1955）、志賀直哉邸（1955）、秩父セメント株式会社第二工場（1956）、東京工業大学創立70周年記念講堂（1958）、千鳥ヶ淵戦没者墓苑（1959）、石川県美術館（1959）、東宮御所（1960）、ホテルオークラ ロビー・メインダイニング（1962）、資生堂会館（1962）、帝国劇場（1966）、山種美術館（1966）、出光美術館（1966）、名鉄バスターミナル（1967）、東京国立博物館東洋館（1968）、東京国立近代美術館（1969）、日本学士院会館（1974）などがある。また、徳田秋声文学碑（1947）、島崎藤村墓所（1949）など、文学碑や詩碑・歌碑あるいは墓所・墓碑などのデザインも多く手がけた。主な著書に、『ギリシャの文化』（1942）、『雪あかり日記』（1947）、『清らかな意匠』（1948）、『意匠日記』（1954）、『現代の眼：日本美術史から』（編 1955）、『修学院離宮』（1956）、『みんなの住まい』（1956）、『日本の住宅』（編 1957）、『日本建築の曲線的意匠・序説』（1960）、『修学院離宮』（1962）、『建築の造形』（1964）、『東宮御所 建築・美術・庭園』（1968）、『御所離宮の庭3 修学院離宮』（1975）、『坪庭』（1976）、『博物館明治村』（1976）、『記念碑散歩』（1979）、『続坪庭』（1979）、『玄関の庭』（1979）などがある。特に、谷口は戦前のドイツでのシンケルの古典主義建築の経験から日本の風土や伝統を見直し、そこに現れる造形の特徴としての「意匠」を現代に適用させることを目指した建築家である。その作風は谷口の「清らかな意匠」という言葉に表現されるように、繊細な日本の伝統的な意匠を近代に生かした清明な造形表現であった。

3. 東京工業大学

森蘊と谷口吉郎は、どちらも昭和初期から終戦後の東京工業大学と関係がある。谷口は1930（昭和5）年に講師となってから1965（昭和40）年に定年退官するまで、35年間にわたって東京工業大学で教鞭をとり、退官後は名誉教授となった。森は東京帝国大学農学部農学科の学生であった1931（昭和6）年頃から東京工業大学教授の前田松韻の研究室に出入りするようになり、終戦後には1953（昭和28）年に『桂離宮の研究』により東京工業大学から工学博士の学位を授与されている。ここでは森と谷口の関係を探るために昭和初期の東京工業大学建築学科の状況をみていくこととする。

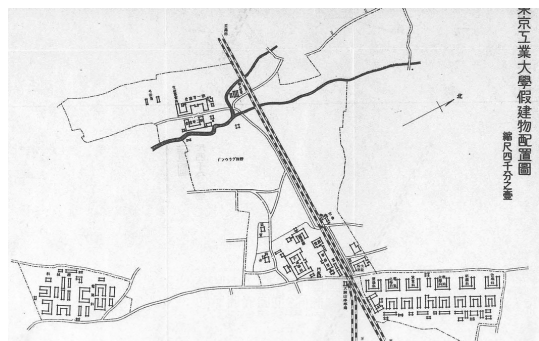


図3 東京工業大学仮建物配置図 設置時点
（東京工業大学 1930 挿絵）

3-1. 昭和初期の東京工業大学建築学科

東京工業大学は1929（昭和4）年4月1日に東京府荏原郡碑衾町大岡山の東京高等工業学校^{注1}の組織を変更して設置された。設置当時の東京工業大学には附属工学専門部と附属工業教員養成所を置いていた。また、当初の教室その他の建築は東京高等工業学校の校舎等をそのまま使用していたが、これらは1923（大正12）年9月1日の関東大震災により当時浅草区蔵前片町にあった東京高等工業学校の校舎が倒壊したため、急遽大岡山の敷地に移転するために建てた仮校舎であった^{注2}（図3・4）。

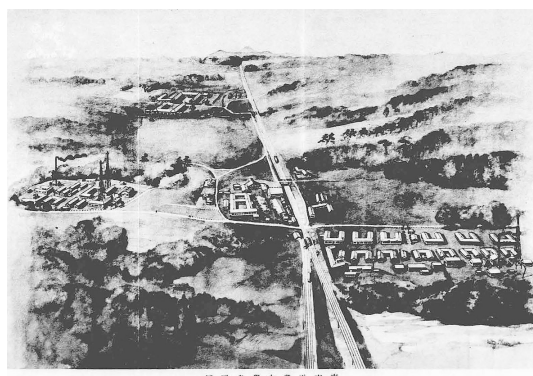


図4 東京工業大学鳥瞰図 設置時点
（東京工業大学 1930 挿絵）

『東京工業大学一覧 自昭和四年至昭和五年』（東京工業大学 1930）によると、1929（昭和4）年度の東京工業大学設置当初には、染料化学科・紡績学科・窯業学科・応用化学科・電気化学科・機械工学科・電気工学科・建築学科の8学科があった。当時の東京工業大学は3年制で、1年が3学期に分かれていた。建築学科は第一学年に13科目、第二学年に10科目、第三学年に卒業計画論文も含めて12科目が設定されており、第三学年第一学期と第二学期には「庭園学」の講義が設定されていた。そのうち建築計画・設計製図分野の教授は小林政一であり、建築史は東京大学工学部建築学科教授の伊東忠太、建築計画・設計製図は同じく当時東京大学工学部建築学科教授の佐野利器が担当講師であった。また、前田松韻は附属工学専門部の講師として名前が出ている。なお、設置年の1929（昭和4）年度に入学した建築学科一期生21名の中に、のちに東京工業大学教授となる藤岡通夫がいた^{注3}。

1930（昭和5）年度には前田は附属工学専門部講師と兼任で東京工業大学の建築計画担当の講師となり、谷口吉郎も同じく建築計画担当の講師に着任した^{注4}。1931（昭和6）年度には、藤岡通夫たち一期生が最終学年の3年生になりカリキュラムの完成年度をむかえたのに合わせて、前田は教授となり、谷口は助教授となった。なお、1931（昭和6）年度以降の前田と谷口の担当科目は以下の通りである^{注5}。

前田松韻 教授：建築計画第一・工芸史・庭園学・設計及製図第一・同第二・同第三・卒業計画及論文

谷口吉郎 助教授：建築意匠・衛生工学（のちに建築衛生）・設計及製図第一・同第二・同第三
1936（昭和11）年度より伊東忠太とともに建築史も担当するようになる

その後、1932（昭和7）年3月に卒業した藤岡通夫は、1932（昭和7）年度より助手^{注6}、1936（昭和11）年度には講師になり設計及製図第二を担当するようになる^{注7}。さらに、藤岡

は1939（昭和14）年度より助教授となり建築史・設計及製図第二の担当者となり^{注8）}、1942（昭和17）年度には建築史・設計及製図第一・同第二・同第三の担当者となった^{注9）}。また、谷口は1943（昭和18）年度より教授となった。

これらより、1929（昭和4）年度の設置以来、東京工業大学建築学科は学年進行に合わせて教員陣を整えていったことがわかる。なお、東京工業大学で建築史を担当していた伊東忠太は谷口の大学時代の指導教員であり、同じく建築計画・設計製図を担当していた佐野利器は谷口の大学院時代の指導教員である。

ここで、東京工業大学および同建築学科の研究教育理念についてみる。1932（昭和7）年12月25日に発行された『昭和8年度 東京工業大学案内』（東京工業大学 1932b）の中の「教授方針」によると、東京工業大学が設置された昭和初期は、それ以前の日本の工業者や技術者がもっぱら西洋の移植に腐心していた時代から、独自の力により新工業を開発樹立することを要する時代になっているとしている。そのために、「此種ノ工業者ヲ養成スルコトヲ本務トスル新設工業大学ノ授業方針ハ學生天賦ノ獨創力ヲ涵養シ専攻セル技術智識ヲ誤リナク自由ニ使ヒコナス能力ヲ附與スルコトヲ眼目」（東京工業大学 1932b p.6）とすることとし、新しい工業を開発樹立するために独創力と知識や技術を自由に使いこなす能力を大切に考えていたことがわかる。また、東京工業大学の教授方針として重視していたことを以下のように記している。

本学ニ於テハ根本理學ノ素養ニ重キヲ置キ之ヲ活用シテ實地ノ問題ニ關シ判斷ヲ誤ラザル實際的有能ノ技術者ヲ作ルヲ本旨トス。根本ノ學理的素養ナクシテ工業ノ實際的指導啓發進歩改良ノ實現乃至新工業法ノ發見不可能トナルハ識者ノ一致シタル意見ニシテ、現今各大学ガ専ラ學理ノ素養ヲ附スルコトニ腐心シツツアルハ主トシテ此理由ニヨルベシ（東京工業大学 1932b p.6）

ここでは、東京工業大学の教授方針として根本の学理に重きを置き、それをもって実地の問題に取り組む実際的能力を持った技術者を育てることを重視していることがわかる。その上で、東京工業大学の教員に対して以下のことを求めている。

根本素養ノ深遠ナル學者ヲ教授トシ育英ノ任ニ當ラシムル事ノ必要ナルハ論ヲ俟サル所ナルモ斯ノ如キ學者ノ陥リ易キ缺陷ハ深遠ナル學理ノ討究ニ耽溺シテ工業ノ現状ニ暗ク其ノ研究スル所モ亦科學ノ色彩ノミ濃厚ニシテ工業ノ實際ニ縁遠キ嫌アルニアリ、[…中略…] 工業ノ實際ニ接觸ヲ蜜ニシ實地問題ヲ實際的方法ヲ以テ討究スル事ニ努メ、教授モ學生モ専ラ實地ニ重キヲ置ク事ヲ特色トセル
(東京工業大学 1932b p.6)

根本の学理に重きを置くという教授方針に対して、東京工業大学の教員としては単に学理の

討究に熱中しすぎるのは欠陥であるとし、実地にも重きを置き、実地問題に対して実際的方法をもって討究することを求めている。そして、「本學ノ努ムル所ハ知識ノ流入ニ非ズシテ知能ノ啓發ニアリ知識ノ死蔵ニ非ズシテ自由ニ活用スル能力ヲ涵養スルニアリ」（東京工業大学 1932b p.6）としている。

その上で、東京工業大学建築学科としては、「本學の建築學科に於ては、衛生、便利、經濟、構造等の各方面から、合理的な建築に向つて、科學的な研究を進める事を以つて、建築學攻究のモットーとなして居る」（東京工業大学 1932b p.198）として、漫然たる造形美術の研究のみに走るのではなく、科學的研究により合理的な建築を実現することを目標としている。さらに、当時の建築学科の教員について以下のように記している。

建築計畫方面には主任教授小林政一博士、及び教授前田松韻博士あり、更に助教授として新進の谷口吉郎學士、講師としての佐野利器博士等皆斯界の第一人者を集め、以つて從來比較的閑却視せられて居た建築計畫方面に對し、新設備の完備と相俟つて各種の理論的並に實驗的研究が進められ、着々効果が挙げられつつある（東京工業大学 1932b p.198）

ここでは、1929（昭和4）年に設置された東京工業大学では、根本の学理に重きを置くと同時に実地にも重きを置き、実地問題に対して理論的實驗的研究を通して実際的方法をもって討究し、特に建築学科では建築計画分野について各種の理論的・實驗的研究が進められ、その結果として合理的な建築を実現することが求められていた。そのなかで、谷口は建築計画分野の一員として期待されていたことがわかった。

3-2. 谷口吉郎と環境・意匠・歴史

ここでは昭和初期の東京工業大学建築学科において、谷口がどのような研究・教育を行っていたのかをより具体的にみていく。

当時谷口が担当していた講義は前に挙げたが、1933（昭和8）年12月15日発行の『東京工業大学要覧』（東京工業大学 1933b）によると、「建築意匠」の講義内容は「1 現代建築思潮概説／2 建築色彩論／3 表面仕上げ／4 室内装置／5 建築的構築物／備考 演習として設計製図を行ふ」（東京工業大学 1933b pp.128-129）であり、「衛生工学」の講義内容は「1 建築と日照／2 温度と生理關係より見たる建築／3 上水及下水設備／4 都市衛生／備考 暖房及換氣を除きたる建築の衛生設備を問題とするも、其の他の衛生學的見地に立ち新建築問題に觸れんとす」（東京工業大学 1933b pp.131-132）であった。なお、「衛生工学」は1935（昭和10）年度から「建築衛生」という講義名に変更されている。

「建築意匠」は、当時の建築思潮について講義した上で、色彩や仕上げ・室内装置などの具体的な内容について教え、最終的には演習として設計製図を行うという実践的なものであったことがわかる。「衛生工学」は、現在の建築環境工学の一部という内容で、理論的實驗的研究を

通して実際的方法をもって討究を行うというものであり、さらに建築環境工学の視点から新建築問題にも触れるというものであったことがわかる。また、「建築史」については1936（昭和11）年度より伊東忠太とともに谷口も担当するようになる。『東京工業大学要覧』（東京工業大学1933b）によると伊藤がひとりで教えていた時の「建築史」の講義内容は西洋建築史と日本建築史であり、ともに現代までを含んだ内容であったことがわかる^{注10)}。そのうち1936（昭和11）年度より谷口は西洋建築史を担当していた^{注11)}。

さらに、谷口の昭和初期の東京工業大学での研究について『東京工業大学一覧』を中心にみると、「サイロ内における物質の流動について」^{注12)}、「建築と日照に関する研究」^{注13)}、「屋内気流の衛生学的研究」^{注14)}、「建築に関する気流の研究」^{注15)}、「暖房による室内気流の観察」^{注16)}、「建築物の風圧に関する研究」^{注17)}であった。これらより、谷口が昭和初期の東京工業大学では主に衛生工学つまり建築環境工学に関する実験・研究を行っていたことがわかる。特に「建築物の風圧に関する研究」は、1936（昭和11）年より東京大学航空研究所において実験を開始し、その研究の成果により1942（昭和17）年に日本建築学会賞学術賞を受賞し、1943（昭和18）年2月6日に東京工業大学より工学博士の学位を授与され^{注18)}、同年に教授となっている。ここでは、昭和初期の谷口にとって「環境」が研究テーマの一つであったことがわかる。

また、谷口は教鞭をとると同時に、東京工業大学の新校舎を建設する復興部にも勤務し設計の仕事にも従事していた。復興部では谷口は当初図工として働いていたが、その後水力実験室の設計を一任される。その時のことを後年谷口は以下のように記している。

その実験室の設計を進めている時、清純な造形にあこがれる意匠心がわきあがってくるのを感じた。そんな「清らかな意匠」は、その後も私の設計に継続する念願となるが、その方向へ私の意匠心が志向するようになったのが、この「水力実験室」の設計であった（谷口 1974 p.66）

水力実験室の竣工は1932（昭和7）年、谷口が27歳の時である。その後、谷口は東京工業大学材料実験室や自邸をはじめとする住宅、あるいは慶應義塾幼稚舎校舎などの設計を通して、東京工業大学の方針である実地に重きを置き、実地問題に対して実際的方法をもって討究することを実践し、その

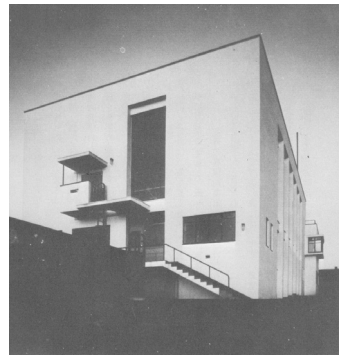


図5 東京工業大学水力実験室
谷口吉郎設計 1932（昭和7）年
（谷口 1974 p.129）

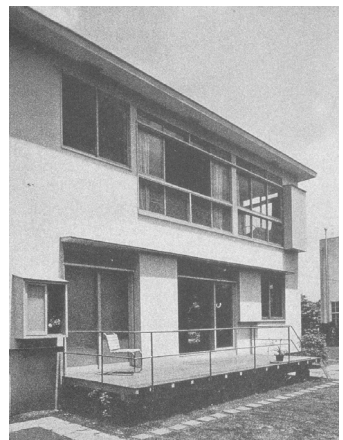


図6 自邸
谷口吉郎設計 1935（昭和10）年
（藤岡 1997 p.36）

なかで「意匠」に対する考えを深めていった。

そして、谷口は1938（昭和13）年1月に日本建築学会の機関誌『建築雑誌』に「建築意匠學・序説」という文章を発表する。ここで谷口は、当時の建築学が各方面に進歩する中で、「意匠」の本義が曲解されたままで建築から見棄てられてしまうようなことがあってはならないとし、建築学の各分野についての考察を行いながら、それと関連して「意匠」とはいかなるものであるかを検討し、その結果として「建築意匠の新しい發足を要望したい。／新しい意匠精神を以て、建築學の諸學科に正しき批判精神を吹き込み、建築家の魂に強い氣力を植ゑ付け、建築家の頭腦に知性を甦へらせるものとしたい」（谷口 1938 p.23）としている。そして、谷口は建築歴史学・建築美学・建築計画学・建築工学の建築学各分野に対する「意匠」の位置付けや必要性を述べた上で、建築学全般に対しての「意匠学」の必要性について以下のように記している。

建築學全般に對しても、批判學としての要素を加味させ、各分科の學科に相互識意を持たせるにも、建築意匠による統率が必要であらう。ここに意匠學の哲學的意義が生ずる（谷口 1938 p.23）

谷口は「意匠」には建築学全般を批判しつつ、相互に関係付ける役割があると考えている。さらに、谷口は建築学科での教育においても「意匠」の必要性を主張している。

建築學科に對しても、單なる學問の研究と建築物の技術たらしめず、「人間」としての建築家を訓育する教程たらしめることに、氣付かしめるものも意匠でなければならぬ（谷口 1938 p.23）

その後、「建築意匠學・序説」を発表した1938（昭和13）年10月、谷口は学生時代の師である伊東忠太のすすめにより、外務省の囑託としてベルリンに新築される日本大使館の工事に関与し、そこに日本庭園をつくる仕事によりドイツに出張した。第二次世界大戦が勃発した翌1939（昭和14）年10月に急遽帰国した後、1944（昭和19）年に谷口はドイツでの経験を雑誌『文芸』に「雪あかり日記」と題して連載した。『文芸』編集長の詩人野田宇太郎と編集顧問の詩人木下杢太郎のすすめによるものである^{注19)}。その後、終戦後に野田宇太郎が東京出版に入ったことから、これらの文章は1947（昭和22）年にまとめられ東京出版から『雪あかり日記』として出版されている。その中に、谷口の考える「意匠心」についての記述がある。

街にも、公園にも、都市計画にも、それが「造形物」である以上、その設計者の作風が明瞭に感じられる。その場合に、作者は「設計者」という個人である場合もあるし、「市民」という集団の場合もある。あるいは「為政者」という官庁の場合もある。さらに「時代」という時の精神が、その作者となっている場合もある。いずれにしても、造形には必ず作者の意匠心が發揮される（谷口 2015 p.26）

ここでは、「意匠心」を発揮する作者が建築家個人だけではないとしている点が谷口の考えをよくあらわしている。これ以降も、谷口の文章や発言には度々「意匠」あるいは「意匠心」という言葉が出てくるようになり、設計による実践やドイツでの体験を通して、谷口にとって「意匠」が「環境」とならんでもうひとつの重要な研究テーマになっていたことがわかる。

また、『雪あかり日記』の中に谷口がベルリンで建築家シンケルの設計した古典主義建築の体験を通して考察した伝統や古典に対する考えが述べられている。

ドイツの古典主義建築を、二十世紀の合理主義建築の立場から、それを模倣主義として批判することは、言葉の上では容易なことである。[…中略…] そこで反省されねばならぬのは、機械的な面からのみ批判していた一面的な態度である。そんな態度には、過去のものを、まだ飛行機も発明されなかった旧時代のものとして、軽く批判し去るような、いわば皮相な態度であった。従って、過去様式から分離することのみを現代の目的と考え、その独断論によって、ギリシャの美しさに感動する自分の内心をも偽り、古き昔の美的探究心を、ただ頭から軽々しく笑い去っていたきらいがある（谷口 2015 p.96）

ここで谷口は分離派建築会などの過去の様式からの分離を主張する建築思潮に対して「皮相な態度」であるとして異議を唱えている。また、シンケルの建築について谷口は以下のように記している。

シンケルにあっては、中世美は古典美とともに、彼の心をひくものであった。[…中略…] シンケルにおいて問題となっていたのは、古典美と中世美のどちらかを選ぶかということよりも、その二つを貫く建築美の本質が、彼の旅行中に抱いた探求の目的であったと考えられる（谷口 2015 pp.125-126）

谷口は一面的な見方で古典美と中世美のどちらかを選ぶというような歴史の見方ではなく、それらを貫く建築美の本質を求めることが重要であるとしている。その上で、谷口は「合目的性」と「伝統性」という両面からシンケルの建築を評価している。谷口はシンケル博物館で「無名戦士の廟」の設計スケッチによりシンケルの設計時点での思考の過程をみたときのことを以下のように記している。

シンケルの建築観は、きわめてはっきりとした技術的根拠から出発し、それによって建築の美的表現が根拠づけられねばならぬと主張する。それ故に、彼の設計は建築が持つべき「目的」をしっかりとつかみ、それを十分に満足させることを以

て、基本条件であるとした。そして、それによっではじめて建築の創造的活動が生まれると考えたのであった。従って「合目的性」と「合材料性」とが、建築の性格を定めるものであって、その正当なる満足によって建築は貴い価値を発揮するものである、と彼は考えている（谷口 2015 p.173）

ここにみられる「はっきりとした技術的根拠」から出発して「建築の美的表現」を根拠づけるという考え方は、谷口が教鞭をとっていた東京工業大学建築学科の教授方針である「合理的な建築に向つて、科学的な研究を進める事を以つて、建築學攻究のモットーとなして居る」（東京工業大学 1932b p.198）と合致している。そして、「合目的性」は谷口の建築理念の重要な位置を占めるようになる。それと同時に、谷口はシンケルの「無名戦士の廟」設計時点での思考の過程について、「この工学的な建築美にめざめた新しい精神も、彼の全意匠心から見れば、一つの側面を示すものにすぎなかった」（谷口 2015 p.174）として、シンケルの意匠心の技術的な革新性ととともに精神的な伝統性にも注目している。

「記念碑性」と「環境適応性」の主張によって、彼の建築精神は「合目的主義の革新性」から、「古典主義の伝統性」に道を開くに至ったのだと、私は考えてみた[…中略…]工学的な正しさを主張し、それを基本条件としたものであったがため、それが古典主義と結びつく場合にも、ただ形式的でなく、堅実な正確性を欲するものとなったのであろう[…中略…]彼の建築には、他の古典主義建築家の作品とちがった一種の品格がそなわり、形式性の奥に、なにか崇高なものに憧れようとする意匠心が清く澄むに至った大きな理由が、そんな制作態度にあるのであろう（谷口 2015 pp.175-176）

谷口はドイツでシンケルの古典主義建築を経験することにより、新しい合理主義建築のみを一面的な見方で評価するのではなく、「歴史」を貫く建築美の本質を探求し、「合目的性」と「伝統性」という両面から「清らかな意匠」を追求するようになる。

このように、昭和初期の谷口は、根本の学理に重きを置きつつ、その上で実地にも重きを置き、実地問題に対して実際的方法をもって討究することを求める東京工業大学の方針のもと、講義を担当していた「建築衛生」「建築意匠」「建築史」に関連して「環境」「意匠」「歴史」について研究・考察を重ね、東京工業大学復興部や自邸をはじめとする住宅、慶応義塾関係の設計の実践や、ドイツでのシンケルの古典主義建築の体験を通して、谷口が生涯を通して追求していくことになる「清らかな意匠」の基礎を築いていった時期であった。谷口の研究・考察は、終戦後の1948（昭和23）年に著書『清らかな意匠』となってまとめられることになる。

3-3. 森蘊と前田松韻

一方、森蘊は昭和初期に前田松韻の研究室に出入りすることにより東京工業大学と関わっていくことになる。

森は、日本建築学会の機関誌『建築雑誌』1983（昭和58）年9月号に「建築と庭園の結びつきを求めて」と題した文章を掲載しているように、生涯建築と庭園の結びつきを求めて庭園研究と造園設計を行なった。森の建築と庭園の結びつきへの興味は学生時代につくり出されている。1929（昭和4）年4月に東京帝国大学農学部農学科に入学した森は、まもなく受講した田村剛の造園学に強くひかれた^{注20}。森は田村の講義を聞き続けると同時に、田村に紹介状を書いてもらって京都府庁社寺兵事課や宮内省京都事務所に outward、京都の社寺や桂離宮、修学院離宮、京都御所、仙洞御所、二条城などの庭園を見て回っている^{注21}。

森はそのなかで、日本庭園を研究する上での建築の知識の必要性を感じ、まず近い親戚筋にあたる当時宮内省建築課長であった北村耕造に会いに行き、さらに北村が主催していた謡曲の会で顔見知りだった北村の東

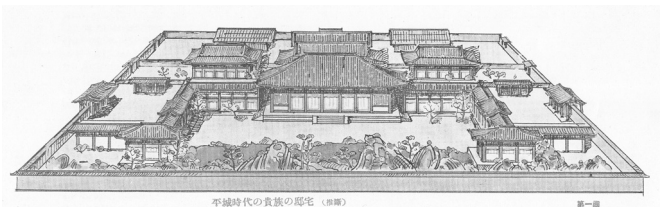


図7 平城時代の貴族の邸宅（推断）
（前田松韻 1927a p.24-25間の口絵）

京大学での同期で東京工業大学教授の前田の研究室に出入りするようになる。前田については、森の遠縁にあたる有職故実研究家で東京帝室博物館学芸委員の関保之助からも会ってみてはどうかとすすめられたとしている^{注22}。当時、前田は寝殿造系の住宅の姿を復元した論文を『建築雑誌』1927（昭和2）年1・2月号に掲載していた（図7）。前田は森に寝殿造系住宅における建築と庭園の研究は両方の専門家が手を取りあって進むべきであると説明した^{注23}。これが後に森の寝殿造系庭園の研究、ひいては建築と庭園の結びつきの研究につながっていくことになる。また、森は1931（昭和6）年から東京帝国大学工学部建築学科の聴講に通いはじめ、1932（昭和7）年には北村・前田の紹介で日本建築学会に入会し、戦前には「平等院庭園考」（1938）、「平安時代前期庭園に関する研究」（1939）、「平安鎌倉時代の造園技術」（1939）などの研究を学会誌に発表している。

森は1931（昭和6）年夏に京都に旅行をした時に関にはじめて会った^{注24}と記しており、「関先生のお口から前田先生のお名前を聞かされたのはそれからまもないことである〔…中略…〕東京工業大学の前田松韻先生に会ってみてはどうかとすすめられた」（森 1973 p.23）としていること、1932（昭和7）年には北村・前田の紹介で日本建築学会に入会していることから考えて、森が東京工業大学の前田松韻の研究室に出入りするようになった時期は1931（昭和6）年夏以降から1932（昭和7）年までの間のことであると考えられる。この時期は谷口吉郎が東京工業大学の講師になった1930（昭和5）年の翌年であり、谷口が助教授となって本格的に東京工業大学で教鞭をとるようになった時期である。また、1932（昭和7）年には谷口の設計による東京工業大学水力実験室が竣工している。

その後、森は大学卒業後に田村が指導していた内務省衛生局に勤務しながら研究を続けるが、1937（昭和12）年には自宅を東京工業大学まで500mほどの目黒区宮ヶ丘に移したことにより、森は前田の研究室を訪ねて指導してもらう機会が増えたとしている^{注25)}。この時の前田松韻の研究室には卒業生の藤岡通夫が講師をしており、森は前田とともに藤岡とも交流することになる。この当時、谷口は東京大学航空研究所で「建築物の風圧に関する研究」をはじめており、谷口が設計した慶応義塾幼稚園舎校舎が竣工している。また、谷口は翌年の1938（昭和13）年10月から1939（昭和14）年10月まで外務省嘱託としてドイツに出張し、シンケルの古典主義建築を体験してくる時期にあたっている。なお、1938（昭和13）年に森は足立康と大岡実が主催していた建築史研究会に大岡と福山敏男の推薦で入会している^{注26)}。

さらにこの時期、森は桂離宮の研究をはじめているが、それにも前田が関係している。

私が建築学会の推せんで、昭和十六年度に「江戸時代初期建築と庭園の研究、殊に桂離宮について」というテーマで、文部省から九六円の研究補助を受け得たのも、はじめは前田先生が、伊東忠太先生や藤島亥治郎先生を説得して、私の「平安時代建築と庭園との関係」の標題を政策上変更しただけのものであったから、けっきょく私が割合に早く桂離宮研究にふみきらざるを得なかったのも、先生のおかげと考えてよさそうである（森 1973 p.25）

前田先生の当時のお弟子の一人に真鍋堅介君がいて、この学生の卒業論文に「小堀遠州の建築論」を出題された。そしてその学生を一週間に二回ずつ私の自宅へよこして、私の研究テーマと見合わせて研究を促進しようとなさったようである。[…中略…] お陰で私はよいライバルを得て闘志を燃やし、桂離宮の作者がはたして小堀遠州なのかどうかをそのときから考えつづけたものである（森 1973 p.25）

森は、東京工業大学での前田との交流を通して、その後の重要なテーマである桂離宮の建築と庭園の結びつきの復原的研究に取り組むことになる。そして、この研究が後に森が東京工業大学に提出する学位請求論文『桂離宮の研究』につながることになる。

このように、昭和初期の森は、内務省・厚生省・東京市での勤務のかたわら、日本建築学会や建築史研究会に所属して研究を続けながら、同時に東京工業大学の前田松韻研究室に出入りし、前田や藤岡との交流を通して「建築と庭園の結びつき」という研究テーマを深めていった。そして、それは谷口が東京工業大学での研究・教育のなかで生涯を通して追求していくことになる「清らかな意匠」の基礎を築いていった時期と重なっている。この時期の森と谷口の具体的な交流は詳しくはわからないが、ふたりの東京工業大学での研究は終戦後に関連を持つようになる。

4. 桂離宮の研究

昭和初期の森蘊の研究を指導してきた東京工業大学教授の前田松韻は戦時中の1944（昭和19）年に亡くなる。終戦後には、森は藤岡通夫との交流を通して東京工業大学とのつながりを持ち続ける。なお、藤岡は1949（昭和24）年1月10日に論文『天守閣建築の研究』により東京工業大学から工学博士の学位を授与されている^{注27)}。1950（昭和25）年には、前田が生前に担当していた東京工業大学の庭園学の講義を、藤岡の依頼により森が非常勤講師として担当するようになる^{注28)}。

そして、森は1953（昭和28）年にそれまでの研究成果をまとめて学位請求論文『桂離宮の研究』を提出し、東京工業大学から工学博士の学位を授与される。森の学位請求論文は、一部構成を変更し加筆して1955（昭和30）年に東都文化出版から『桂離宮』として出版されている（図8）。そのなかで、ワルター・グロピウスの序文の後の緒言において森は「本論完成に當つて常に協力助言された東京工業大學教授谷口吉郎博士、藤岡通夫博士に最大の感謝を表する」（森 1955a p.VIII）と記している。昭和初期には、同じ東京工業大学でそれぞれの研究の基礎を築いていった森と谷口に、ここで接点があったことがわかる。

学位請求論文『桂離宮の研究』の緒言によると、森は1936（昭和11）年頃からしばしば桂離宮の実地踏査を試み、1941（昭和16）年の日本学術振興会学術奨励金下附により本格的に桂離宮の研究を開始した。この研究の成果は、終戦後の1951（昭和26）年に創元社から出版された森の著書『桂離宮』にまとめられている。さらに1950（昭和25）年度には文部省科学研究費の補助を受けたが、その時のことを森は以下のように記している。

昭和25年度に於ては文部省科学研究費の補助を受け、東京工業大学教授谷口吉郎博士の協力者として、博士より種々便宜を與えられた。又宮内庁書陵部に於ては、昭和26年度、同大学教授藤岡通夫博士が整理された厩大なる史料の中から、数多くの直接間接の新史料の発見があり、その利用を許可された事は、本研究の進捗の上に、一段とよい結果を、もたらしたことになるのである（森 1953 p.6）

1950（昭和25）年度には、桂離宮の研究において谷口と森が研究協力者であったことがわかる。さらに、藤岡による協力が森の研究をより進めることになった。この研究の成果が森の学位請求論文『桂離宮の研究』につながっている。『森蘊氏提出學位請求論文審査報告』をみると、審査員が藤岡と谷口及び科学技術史が専門の東京工業大学教授加茂儀一の3名であり、藤岡が主審であったことがわかる。審査員らによる森の論文の評は以下の通りである。

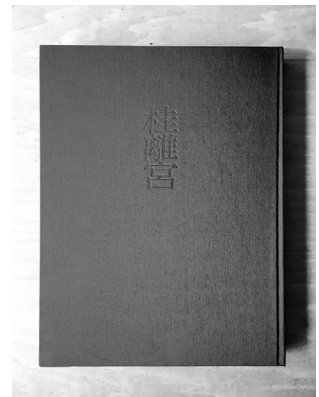


図8 桂離宮
森蘊 1955（昭和30）年
（筆者撮影）

著者は従来行われた文献や実地踏査により行われた桂離宮の研究を更に一段と進

め、多くの新史料を見出すと共に、古材鑑定、方位推定、地形測量、石質鑑定、産地調査等工学的な操作を併用して、桂離宮を建築学及び庭園学上より総合的に研究し、その眞価を見出したことは、桂離宮研究に一新生面を開拓したのであって、著者の学殖の深さを示すばかりでなく、建築計画学及び庭園学に裨益するところが多く、工学上貢献する所多大である（藤岡他 1953 p.9）

ここでは、森の研究のうち、従来の桂離宮研究では行われなかった工学的研究手法を高く評価している。また、森も論文の総括の中でその点に触れている。

桂離宮の建築史的の研究にあたっては、單に文献による歴史学的方法と叙述に止まらず、建築部分の精密なる実測製図、地形高低の実測製図、樹草岩石の測定、建築古材の樹種、年代、仕口の鑑定、池底の浚渫による調査、建築方位角の天文学的算出、運搬土量の算出など、建築、土木、造園工学的な精密な操作を行った（森 1953 p.1140^{注29}）

森はこの桂離宮の研究において、これらの工学的手法を用いた研究を行ったことは、東京工業大学建築学科の教授方針である「根本の学理に重きを置くと同時に実地にも重きを置き、実地問題に対して理論的実験的研究を通して実際的方法をもって討究することを求める」に合致しているとみることができる。この工学的手法を用いて創設当時や増造時の桂離宮を復原し研究する方法、すなわち「復原的研究」は森のその後の研究手法の中心となるものである。さらに、それにより森は桂離宮の研究が今後の工学界、ひいては日本文化に貢献できるとしている。

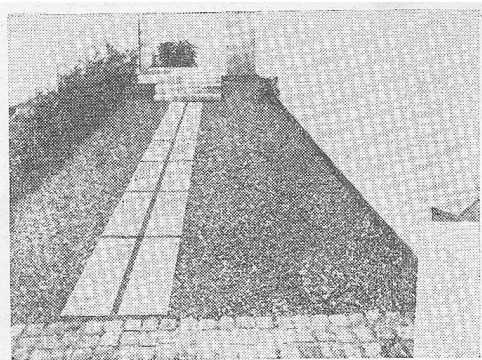
桂離宮は單に藝術的作品として文化財的意義があるばかりでなく、今後の建築、土木、造園工学は多くの場合各々孤立してあるべきではないことを教える。即ち新しい建築工学の在り方として、環境建築学なる一部門の成立が可能であること及び、かかる総合研究が今後工学界に裨益し、日本文化に貢献することの大なるものあることを信ずるものである（森 1953 p.1141）

森は、建築・土木・造園工学はお互いに連携する必要があり、総合的に研究する必要性を指摘している。そして、森はこの桂離宮の研究において取り上げたい大きな問題を緒言において「意匠心」という言葉を用いて説明している。

ここで取り上げたい大きな問題は、桂離宮の性格を把握することであり、その位置、方位、構造等を導来するに至つた社會的背景と生活環境及び作者達の意匠心をかり立て、この傑作を生ぜしめたその動機と工事の経緯等を究明するにあるのである（森 1953 p.4）

森が研究手法として地形測量を行うようになるのは、「庭園史研究に着眼するずっと以前から地理が好きで地図を買い集め、大学では測量学を熱心に勉強していたから」（森 1981 p.12）であり、さらに大岡実が「寺地の研究調査は実測に始まる」として実測の重要性を説いて」（森 1981 p.14）いたことに刺激されたからであるとしているが、地形測量を含めた工学的手法を用いて創設当時や増造時の桂離宮を復原する「復原的研究」によって、作者達の「意匠心」をかり立てた動機の究明をするという点には、研究協力者であり学位請求論文の審査員であった谷口の影響があると考えられる。

ここでは、1950（昭和25）年以後の桂離宮研究では森と谷口が研究協力者となり、また森の学位請求論文『桂離宮の研究』において谷口が審査員のひとりであったことがわかった。特に森の博士論文で工学的手法を用いた研究を行ったことは、東京工業大学の教授方針に合致しており、さらに作者達の「意匠心」をかり立て、この傑作を生ぜしめたその動機の究明という点に、森の研究に対する谷口の影響を見ることができる。森が学位請求論文『桂離宮の研究』において谷口から常に協力助言されたとしたのには、このような森と谷口の交流が背景にあったことがわかる。さらに、森は1950（昭和25）年発行の『美しい庭園 — 鑑賞と造庭—』のなかで、谷口の設計した住宅の庭を好ましい例として取り上げている（図9）。また、森は1960（昭和35）年発行の『日本の庭』のなかで、「昭和十年頃から後、殊に終戦後の庭園界の特色として、農林関係の出身者よりは建築家出身の設計家の進出が目立っている」（森 1960 p.129）として、堀口捨己らとともに谷口の名前を挙げている。これらのことより、森が谷口を庭園設計者としても認めていたことがわかる。



第五四図 門から玄関までの空間の建築的取扱方
白い塙壁と敷石道と灌木とが調和して
截然たる美しさを示している。

東京都中野K氏住宅

谷口吉郎博士設計

図9 K氏住宅 谷口吉郎設計
（森 1950c p.223）

5. 家と庭

谷口吉郎は『建築に生きる』（1974）のなかで子どもの頃から建築と庭園に興味があったと記している。たとえば、谷口が故郷金沢の犀川の思い出を述べた場面である。

幼い私は河原で小石を組んで小川を作り、木片で橋をかけた。その小さい手作りの庭を身をかがめながら股眼鏡でながめると、遠くに戸室山や医王山の山々が、

美しい絵のように見える。両足の間に、白い雲が青空に浮かび、それが小川の水面に映って大庭園のように見えた。／これは造園でいう「借景」である。そんな小さい手製の借景を、私は子供の遊びとしていた。そのほか、川の石が水でぬれると、石の肌がいろいろの美しい色を発することを、幼い私の目は知っていた。これも日本の造園術には大切なことである。建築家となった私の意匠心はこのように童心のころから、ふるさとの川から造形的な感化を受けていた

(谷口 1974 p.8)

また、谷口は金沢市の高台にあった石川県立第二中学校に通っていた時に、学校の帰り道に兼六園を通り抜け、庭園の造形に関する知識を豊かにしていった。

学校の帰り道、兼六園を通りぬける時、いろいろと道をかえて、広い園内をすみずみまで歩いている。そのころは園路に垣がなかったので、勝手に歩くことができた。[…中略…] だから私は四季の兼六園の姿をよく知っていた。それも一カ年だけの観察でなく、中学に通った各年見ているので、兼六園は私の造形教育に、蔵書の豊かな図書館のような役割をしていたことになる。そのためか、今でも私は庭園が好きである (谷口 1974 p.39-40)

さらに、谷口が生まれた九谷焼窯元の家や友達の家などの庭や茶室の経験を通して、谷口は自然と美的センスに感化を与えられていた^{注30)}。

大学卒業後、東京工業大学に勤めるようになってから8年後、1938(昭和13)年に師である伊東忠太のすすめにより日本大使館建設のために外務省嘱託としてドイツに行くことになった谷口は、伊東の指示により日本大使館の庭園の設計図を描いた。谷口はその時のことを『雪あかり日記』のなかに「ベルリンの庭石」と題して、ベルリンでの日本庭園にふさわしい石探しのてんまつとともに記している^{注31)}。しかし、この日本庭園は実現しないままに第二次世界大戦の勃発とともに谷口はドイツを去ることになる^{注32)}。

このように、谷口は故郷金沢の犀川や兼六園などで子どもの頃から庭園に触れ、恩師伊東忠太のもとで庭園設計を行っていたことがわかる。ところで、谷口が庭園に関する発言や文章を多く発表するようになるのは1950年代のことである。たとえば、『淡交』1953(昭和28)年10月号に「庭作と鑑賞」と題する座談会が掲載されている。ここで谷口は、「近ごろの庭というのは非常に公共性を帯びてきている[…中略…]庭というものの性格が變つて來ている」(谷口他 1953 p.25)とした上で以下のように述べている。

アパートみたいになると公衆の庭園みたいなもの、街路には街路樹、それにさっき言ったような橋のたもととか、川岸なんかというものをもつと庭園的というか、

造型的にやらなくてはいけない。それには日本人特有の石の使い方なり、材料の選び方というものがもつと出ていいのではないか。／そこで日本人は外国と違つた一つの造型観を持つている〔…中略…〕モダン・アートなんかの立場から見ると、日本の庭園のコンポジションは非常に新しいコンポジションだという事になる。だからこれが日本の本来のものなんだから、これがさらに發展して日本の風土をつくるような造型というものが出て来ると非常にいいと思う

(谷口他 1953 p.26)

ここで谷口は都市のなかでの庭園の公共性について述べている。そこに伝統的な日本庭園の石の使い方や材料の選び方、その構成、あるいは造形観を發展させることで、それが新しい日本の風土となるような造形を理想としている。その上で、「個人が建てるときでも周囲との影響を先に考えてやるという考へが必要」(谷口他 1953 p.27) であるとしている。同じく、『芸術新潮』1957年10月号に掲載された「現代の庭」のなかでも谷口は「昔の名園には皆その時代の情熱が結晶していた」とした上で、「現代の庭園は公衆の現代生活と結びつき、日常の生活環境にまで及ぶ必要がある〔…中略…〕今日の生活に現代の新しい造形感覚を活かし、日常の環境にも生活のポエジーを美しく結晶せしめたい」(谷口 1957b p.206) とし、先の座談会同様、庭園の公共的な側面に言及している。

また、1956(昭和31)年発行の『生活のなかの近代美術』のなかに谷口は「家と庭」と題する文章を書いている。ここでは、まず「庭園」という言葉の意味を考察している。

庭を造る ― 造園という言葉には、ただ単に庭造りの仕事とか技術を意味するが、それが近ごろでは、造園という言葉が用いられず、庭園と言われているのには、それが美とか文化的な造形に関与するものであることを、いい現わすためであろう。〔…中略…〕庭園という専門的な技術も、人間生活の美しい向上を目的とする空間芸術である。その点で、建築家と造園家は、もっとその目的のために、おたがいに理解し合い、協力し合う必要を痛感する(谷口 1956a p.50)

日本の大学で用いられていた学術語の「造家」を「建築」と改めることを提唱したのは谷口の師である伊東忠太である。谷口は、それと同じことが「造園」と「庭園」にも言えるということを示している。「造家」と「建築」という言葉について、谷口は1938(昭和13)年1月に発表した「建築意匠學・序説」のなかでも触れているが、それに対して「造園」と「庭園」という言葉について言及するのは1950年代になってからと考えられる。その上で、谷口は建築家と造園家の間に連携が必要であるとしている。

さらに、谷口は「家と庭」のなかで「三つの空間」について書いている。ここでいう「三つの空間」とは着物と室内と戸外のことである。三つの空間の考察を進めるなかで、谷口は「戸外」の生活空間に対する創造力が忘れられがちであるとしている。

その戸外の造形が、すなわち庭園である。庭園は室内から直接に外部に接続する戸外であるが、その範囲ははなはだ広い。だから個人の所有する敷地内の造園だけが決して庭園ではない。社会の自然環境を美しく造形化することが、すべて庭園とっていい（谷口 1956a p.54）

日本の家では、内と外との区別がないくらい、窓も大きく開いており、庭も庇の下まで接近している。／日本の庶民的な庭の喜びは前時代的である。それを、もっと近代化し、その日本の庭の美的特性を、近代生活に適応せしめることが、今日の日本の建築家と庭園設計者の使命であろう（谷口 1956a p.59）

ここでは、公共的な庭園について触れた上で、日本の伝統的な庭園の美的特性を近代生活に適応させる必要があるとし、それは建築家と庭園設計者の使命であるとしている。

ここでみたように、谷口は1950年代になると庭園に関する発言や文章が多くなる。それは、谷口が昭和初期に基礎をつくり上げていった「清らかな意匠」という視点から日本庭園を見つめ直す行為であった。「環境」「意匠」「歴史」という視点から、谷口の興味が庭園へと向かうのはごく自然なことと考えられるが、ここでは、それが森蘊の桂離宮の研究に谷口が研究協力者となり、それをまとめた森の学位請求論文の審査員を谷口が務めたのと同じ時期であったことに注目したい。

6. 修学院離宮

1950年代になって庭園に関する文章を多く書くようになった谷口は、1956（昭和31）年に『修学院離宮』を出版する。後に、『婦人之友』1958（昭和33）年1月号に掲載された「茶の湯を語る夕」のなかで、堀口捨己からこの本について聞かれた谷口は以下のように述べている。

実は私の「修学院離宮」は、堀口さんが先にお書きになった名著「桂離宮」の後をひきうけて書いたものです。それで、庭や茶室に対する考え方も、堀口さんと御同様に建築的な見方が主眼となつております。しかし修学院で私が特に感じましたことは、その中に含まれている「音」です（谷口他 1958 p.49）

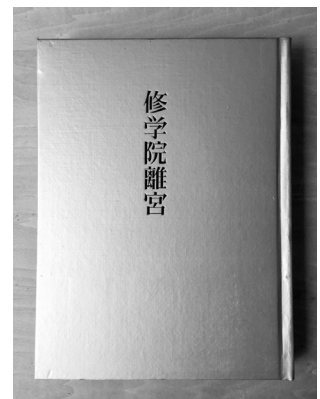


図10 修学院離宮
谷口吉郎 1956（昭和31）年
（筆者撮影）

谷口の『修学院離宮』は「音」がテーマになっている。文章全体が楽章として展開し、庭を

踏む足音や遣り水の流れや滝の音など、傾斜地に3カ所に分かれた修学院離宮の地理的特徴や空間構成、造形の意匠の特徴をさまざまな音を聞き分けることで表現している。ここには、「環境」の一要素である「音」に注目している点に谷口らしい視点が設定されている。

そして、この本は毎日新聞社が発行した『桂離宮』『正倉院』に続く三部作の最終刊にあたり、その最初、1952（昭和27）年発行の『桂離宮』を担当したのが堀口である。そのはしがきにおいて堀口は、「先には横井時冬氏、小澤圭次郎氏、川上邦基氏、近くは外山英策氏、澤島英太郎氏、森蘊氏、藤島亥治郎博士など」（堀口 1952 はしがき）によるそれまでの多くの研究に負うところは少なくないとしており、堀口が1951（昭和26）年に出版された森の著作『桂離宮』など、森の研究を参考にしていたことがわかる。その上で、堀口は「然し思ひつき到つた所は、全く離れた所にあつた」（堀口 1952 はしがき）としている。

いまの桂離宮の建物や庭については、その美しさを如何に見る可きかと云ふ事に於て、既に私は幾とせかの心を養つてゐる。それを示すものは、ここでは、カメラを通して語つてゐる所のものに外ならない（堀口 1952 はしがき）

堀口は「建物や庭を自ら作つて見て、それを寫眞にした場合、如何にその作品としての價值が、いつはる事もなく示されるかを、私は日頃身にしみて知つてゐる」（堀口 1952 はしがき）とし、建築家として写真を通して桂離宮の建物や庭の良さや美しさを表現しようと試みている。

同じように谷口は『修学院離宮』のはしがきに以下のように記している。

「修学院離宮」を純粹の歴史的立場から論じ、その創設や変遷を明らかにすることは、もとより大切であるが、その方面にはそれぞれの研究書がある。ことに森蘊博士の研究は、古図や古い記録によって造営の規模を復原されたものであるが、私はそれから多くの知識を得たことを深く感謝した

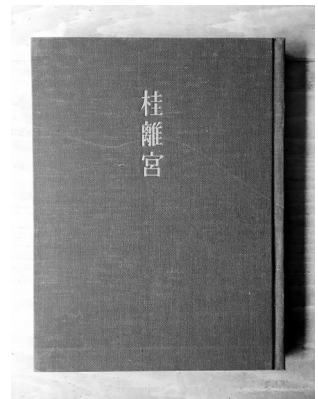


図11 桂離宮
堀口捨己 1952（昭和27）年
（筆者撮影）

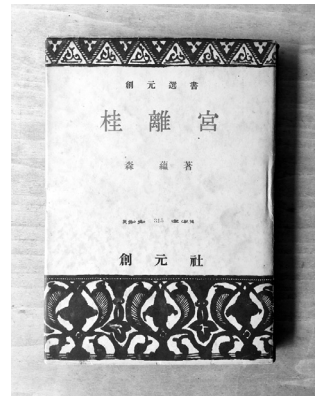


図12 桂離宮
森蘊 1951（昭和26）年
（筆者撮影）



図13 修学院離宮の復原的研究
森蘊 1954（昭和29）年
（筆者撮影）

い。しかし、私自身は建築の設計に関係し、その造形の意匠に興味をもつものであるので、この書はそんな自分の観点到に立った、言わば観察と感想のメモである（谷口他 1956b はしがき p.2）

ここで谷口は森の研究から多くの知識を得たとしている。さらに、谷口は挿絵に使う修学院離宮の実測図を奈良国立文化財研究所から借りたとしており、これは1962（昭和37）年に淡交新社から『修学院離宮』の普及版が出版された時に森から借りたと変更している。谷口の『修学院離宮』が発行された2年前の1954（昭和29）年に森は『修学院離宮の復原的研究』を発表し、1955（昭和30）年に森の著書『桂離宮』と同じ創元社から『修学院離宮』を出版している。つまり、堀口の『桂離宮』の前に森の『桂離宮』が、谷口の『修学院離宮』の前に森の『修学院離宮の復原的研究』『修学院離宮』が、それぞれ出版されている。そして、堀口も谷口も森の研究から多くの知識を得ながら、建築家としての観点到に立って観察し、桂離宮あるいは修学院離宮の造形の意匠を表現しようとしたのである。

ところで、森の『修学院離宮』の緒言に修学院離宮研究の経緯が説明されている。

長年に亘り、宮内廳書陵部、東山御文庫、史料編纂所、陽明文庫をはじめ各處で桂離宮に關する史料を涉獵している中に、桂離宮の諸事情が次第に判明していつたのさえ、僥倖と思えてならなかったのに、それに併行して全く思いもかけない程短い期間中に、次から次へと修學院離宮關係の史料があつまつて來た

（森 1955 緒言）

森の修学院離宮研究は桂離宮研究と併行して進んでいたことがわかる。そして、1950（昭和25）年度には、桂離宮の研究において谷口と森が研究協力者であり、さらに谷口は桂離宮研究をまとめた森の学位請求論文の審査員であったことにより、谷口は森の桂離宮研究とともに修学院離宮研究についても研究方法やその成果についてよく知り得たであろうと考えられる。谷口が『修学院離宮』において森の研究から多くの知識を得たとしているのには、このような森と谷口の交流が背景にあったことがわかる。

そして、1975（昭和50）年に世界文化社から発行された『御所離宮の庭3 修学院離宮』では、巻頭文「修学院山莊」を谷口が、解説「修学院離宮の歴史」を森が担当し、さらに修学院離宮庭園実測図は森が代表を務める庭園文化研究所が提供している。ここでは、修学院離宮に関する一冊の書籍の中で、純粹に歴史的立場から「復原的研究」によって建築と庭園の結びつきを明らかにしようとする森と、建築家としての観点到から「清らかな意匠」という視点を持つ

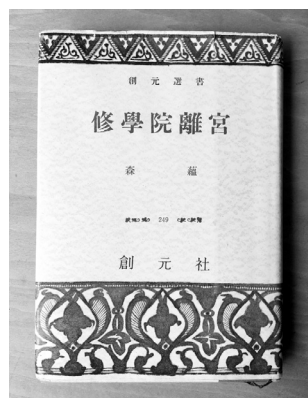


図14 修学院離宮
森 1955（昭和30）年
（筆者撮影）

て建築と庭園の意匠を表現しようとする谷口の連携が実現している。

7. おわりに

本稿では、建築と庭園のつながりをもとめた庭園研究者で造園家である森蘊と、伝統的な建築と庭園について「清らかな意匠」という視点から考察を行った建築家である谷口吉郎について、それぞれの著作などから昭和前半期における庭園研究者・造園家と建築家の関係を探った。

昭和初期の谷口は、東京工業大学で講義を担当していた「建築衛生」「建築意匠」「建築史」に関連して「環境」「意匠」「歴史」について研究・考察を重ねた。博士論文となる「建築物の風圧に関する研究」などのいわゆる建築環境工学に関する研究を重ね、水力実験室をはじめとする東京工業大学復興部での設計や自邸などの住宅、慶応義塾関係の設計などによる造形の意匠の実践、ドイツでのシンケルの古典主義建築の制作態度などを通した風土や伝統への考察により、谷口が生涯を通して追求していくことになる「清らかな意匠」の基礎を築いていった時期であった。一方、昭和初期の森は、内務省・厚生省・東京市での勤務のかたわら、日本建築学会や建築史研究会に所属して研究を続けながら、同時に東京工業大学の前田松韻研究室に出入りし、前田や藤原通夫との交流を通して、実測などの工学的手法による伝統的な建築と庭園の復原的研究により「建築と庭園の結びつき」を明らかにするという研究テーマを深めていった。

つまり、昭和初期に森と谷口は同じ東京工業大学において、東京工業大学の教授方針のもと、それぞれの生涯の研究テーマの基礎を築いていった。

終戦後には、森は桂離宮の復原的研究を進めるなかで、1950（昭和25）年に文部省科学研究費の補助を受ける際に谷口と研究協力者の関係となる。さらに、森は1953（昭和28）年に東京工業大学に学位請求論文『桂離宮の研究』を提出し、谷口はその審査員のひとりを務め博士論文として認定する。この時、森が地形測量を含めた工学的手法を用いて創設当時や増造時の桂離宮を復原する「復原的研究」によって、作者達の「意匠心」をかり立てた動機の究明をするという点に、研究協力者であり学位請求論文の審査員であった谷口の影響があると考えられる。その上で、森は著書のなかで谷口の設計した住宅の庭園を好ましい例として取り上げるなど、庭園設計者としても谷口を評価していたことがわかった。一方、谷口の「環境」「意匠」「歴史」についての研究・考察は、終戦後の1948（昭和23）年に『清らかな意匠』となってまとめられる。その上で、谷口は1950年代に庭園に関する文章が多くなるが、それは谷口が昭和初期に基礎をつくり上げていった「清らかな意匠」という視点から日本庭園を見つめ直す行為であり、桂離宮の研究で森の研究協力者となり、さらに森の学位請求論文の審査員を務めた時期と重なっている。さらに、谷口は1956（昭和31）年に出版された『修学院離宮』では森の研究から多くの知識を得たとしており、挿絵に使う修学院離宮の実測図を森から借りたとしている。

以上のことから、森と谷口には実作を通しての連繋はないものの、東京工業大学において森と谷口との間に研究の面での交流があり、お互いに評価し、影響を与えていたことがわかった。

		谷口吉郎 (1904－1979)	森 繭 (1905－1988)	備 考
1904年	明治37年	6月4日 石川県金沢市に生まれる 生家は九谷焼の窯元		
1905年	明治38年		8月8日 東京府立川市に生まれる	
1911年	明治44年	石川県立師範学校付属小学校入学		
1918年	大正7年	石川県立第二中学校入学	青柳小学校卒業	
1922年	大正11年	第四高等学校入学		
1923年	大正12年		東京高等師範学校附属中学校卒業	
1925年	大正14年	第四高等学校卒業 東京帝国大学工学部建築学科入学		
1928年	昭和3年	東京帝国大学建築学科卒業	浦和高等学校理科乙類卒業	
1929年	昭和4年	東京帝国大学大学院入学	東京帝国大学農学部農学科入学	東京工業大学設置
1930年	昭和5年	東京工業大学講師 (3月31日)		前田松韻 東京工業大学講師 堀口捨己 吉川邸
1931年	昭和6年	東京工業大学助教授 (5月6日) 結婚 このころから森繭が東京工業大学の前田松韻研究室に出入りするようになる	東京帝国大学工学部建築学科の聴講に通いはじめる	前田松韻 東京工業大学教授
1932年	昭和7年	「サイロ内に於ける粉状物質の流動」 「鉄筋コンクリート構造建築物の傳熱に就て」 東京工業大学水力実験室	東京帝国大学農学部農学科卒業 日本建築学会に入会	藤岡通夫 東京工業大学卒業 堀口捨己「現代建築に現はれたる日本趣味」
1933年	昭和8年	東京工業大学建築材料研究所、三井邸家族室、佐々木邸	内務省衛生局事務取扱 企画課勤務 「毛越寺に於ける藤原時代造園遺蹟の研究」	藤岡通夫 東京工業大学助手 堀口捨己 岡田邸
1934年	昭和9年		東京帝国大学大学院修了	
1935年	昭和10年	「室内空気の自然対流に関する模型実験」 南薫造山荘、自邸		
1936年	昭和11年	東京大学航空研究所で「建築物の風圧に関する研究」をはじめる		藤岡通夫 東京工業大学講師 堀口捨己「茶室の思想的背景と其構成」
1937年	昭和12年	「矩形断面室内の暖房気流」 「風洞実験に就て」 慶應義塾幼稚舎校舎、梶浦邸 森繭が目黒区宮ヶ丘に引っ越しし東京工業大学に近くなったため前田松韻研究室を訪ねる機会が増える		
1938年	昭和13年	「建築意匠学・序説」 「陸屋根建築物の風洞実験」 慶應義塾大学予科日吉寄宿舎 日本大使館建設工事の技術交渉のため外務省嘱託としてドイツに出張 (10月20日神戸出港)	厚生省体力局事務取扱 厚生技手 体力局施設課勤務 建築史研究会に入会 「平等院庭園考」	堀口が日本庭園協会の理事に就任した際、森は評議員のひとりであった
1939年	昭和14年	第二次世界大戦勃発により帰国 (10月28日横浜着)	「平安時代前期庭園に関する研究」 「平安鎌倉時代の造園技術」	藤岡通夫 東京工業大学助教授
1940年	昭和15年	木下空太郎らと「花の書の会」結成『花の書』創刊 「建築の風壓問題とその耐風対策樹立の要望」 「ナチスの建設活動」	横井時冬著『日本庭園發達史』註校 堀口捨己・森繭	
1941年	昭和16年	「風洞実験に於ける建築模型の方法効果と風壓係数」	東京市技手 市民局公園課勤務	
1942年	昭和17年	「建築物の風圧に関する研究」により日本建築学会賞 (学術賞) 『ギリシヤの文化』		
1943年	昭和18年	工学博士 学位論文『建築物の風圧に関する研究』 (東京工業大学) 東京工業大学教授	東京市技師 公園部技術課勤務	堀口捨己「洛中洛外園の建築的研究」
1944年	昭和19年	雑誌「文藝」11月号に「雪あかり日記」連載開始 (1945年3月号まで)	東京都井之頭恩賜公園自然文化園長 正七位 『日本庭園の伝統』	
1945年	昭和20年		海軍技師 ボルネオ民政部勤務 高等官六等 『平安時代庭園の研究』	
1946年	昭和21年		復員 東京都立農事試験場勤務	西澤文隆 茶室及び日本建築の研究
1947年	昭和22年	『雪あかり日記』 藤村記念堂、徳田秋声文学碑	東京植木株式会社勤務 (研究部長) 国立博物館保存修理課兼事業課勤務	

庭園研究者・造園家 森蘊と建築家 谷口吉郎 —— 昭和前半期における建築家と造園家の交流 ——

1948年	昭和23年	『清らかな意匠』 慶應義塾中等部三田校舎、慶應義塾幼稚舎合併教室	国立博物館調査員 保存修理課勤務	堀口捨己『草庭』
1949年	昭和24年	藤村記念堂その他により日本建築学会賞（作品賞） 慶應義塾大学通信教育部事務室・第二校舎・第三校舎・学生ホール、島崎藤村墓所	文部技官 『まぐらの住居』	堀口捨己『利休の茶室』
1950年	昭和25年	慶應義塾大学病院は号病棟	国立博物館保存部建造物課勤務 『美しい庭園 ―観賞と造園―』 『日本の庭園』	
		藤岡通夫に依頼されて森蘊が東京工業大学において「庭園学」の非常勤講師を担当する 文部省から研究費を得た桂離宮の研究において森蘊と谷口吉郎が研究協力者となる		
1951年	昭和26年	慶應義塾女子高等学校第一校舎、慶應義塾大学第二研究室（万来舎）、慶應義塾普通部日吉校舎、佐々木小次郎の碑、原民喜誌碑	『桂離宮』 『桂離宮と修学院』	藤岡通夫 東京工業大学教授 西澤文隆 このころから名園名席の探求
1952年	昭和27年	文化財専門審議会専門委員 石川県織維会館、兒島喜久雄墓碑、慶應義塾女子高等学校第二校舎、慶應義塾大学病院は号病棟、慶應義塾大学第三研究室、慶應義塾大学体育会本部	奈良文化財研究所建造物研究室長	堀口捨己『桂離宮』
1953年	昭和28年	桃李境 プール・付属家、十和田記念碑、佐藤春夫詩碑、宮田重雄画室、山本別邸・書斎・書庫、慶應義塾大学日吉第三校舎、	工学博士 学位論文『桂離宮の研究』（東京工業大学） 奈良県文化財専門審議会専門委員 『生活の歴史・はぐたちの研究室』 今西清兵衛邸露地	このころ森蘊と西澤文隆の親交が生じる
		谷口吉郎が森蘊の学位請求論文『桂離宮の研究』の審査員のひとりを務める		
1954年	昭和29年	『意匠日記』 慶應義塾大学病院特別病棟、高田保墓碑、森鴎外詩碑、石川県議会議事堂、薄田泣菫詩碑、国立科学博物館理工学館、石橋家墓所 展覧会 現代の眼「日本美術史から」会場構成	『修学院離宮庭園の復元的研究』	
1955年	昭和30年	『現代の眼：日本美術史から』（編） 相模原ゴルフクラブ クラブハウス、集団週末住居、志賀直哉邸、新聞功労者顕彰碑（自由の群像）、高崎市議会議事堂	『修学院離宮』 『桂離宮』	
1956年	昭和31年	秩父セメント株式会社第二工場により日本建築学会賞（作品賞） 『修学院離宮』、『みんなの住まい』 毎日出版文化賞受賞 高村光太郎葬儀式場構成、慶應義塾大学医学部基礎医学第一校舎、秩父セメント株式会社第二工場、木下圭太郎詩碑、幸田延音楽碑、慶應義塾中等部三田校舎	横浜国立大学非常勤講師 『新版桂離宮』 唐招提寺本坊客殿庭園	
1957年	昭和32年	『日本の住宅』 慶應義塾大学医学部基礎医学第三校舎、佐伯邸、佐伯別邸、弟橘媛歌碑、金沢商工会議所	奈良県立公園審議会委員 奈良女子大学非常勤講師 『日本の庭園』 東大寺電蔵院庭園	西澤文隆 Diesel 記念公園建設のため渡独
1958年	昭和33年	東京工業大学創立70周年記念講堂、原敬記念館、藤村記念館、慶應義塾発祥記念碑、佐藤邸、警視庁築地警察署数寄屋橋巡査派出所、第四高等学校寮歌記念碑（南下郡の碑）	『にわ・玉川こども百科77』 『日本の燈籠』（アサヒ写真ブック） 法華寺犬の庭、大神神社参集所内苑	
1959年	昭和34年	千鳥ヶ淵戦没者墓苑、解体記念碑、蘭学記念碑、石川県美術館、青森県立体育館、別宮邸、小林邸	『中世庭園文化史』 加満田旅館庭園	
1960年	昭和35年	『日本建築の曲線の意匠・序説』 桃李境 本館玄関・ロビー、火野葦平文学碑、東宮御所、八火箭光永星郎之碑、展覧会 小林古径造作展会場構成、展覧会 伝統工芸展「日本人の手」会場構成	日本建築学会賞受賞『中世庭園史の研究』 『日本の庭』 唐招提寺御影堂庭園	
1961年	昭和36年	東宮御所その他により日本芸術院賞 明治建築の保存を土川元夫氏に相談 青森県庁舎、秩父セメント株式会社製管工場		
1962年	昭和37年	日本芸術院会員となる 財団法人明治村認可 常任理事となる 『修学院離宮』 ホテルオークラ ロビー・メインダイニング、新渡戸稲造記念碑、資生堂会館、文京区立隅外記念本郷図書館、日夏耿之介詩碑、森鴎外文学碑、三菱金属鉱業株式会社大井工場、秩父セメント株式会社稲谷工場	『寝殿造系庭園の立地的考察』 『TYPICAL JAPANESE GARDENS』	西澤文隆 このころから西洋庭園史研究、支那庭園研究、日本庭園研究、都市空間研究、寝殿造、書院造研究
1963年	昭和38年	永井荷風文学碑、田邊元墓碑、吉川英治墓所、不二禅堂、石井漢「山を登る」記念碑、資生堂画廊、大下婦人葬儀式場構成、	奈良県文化賞受賞 大神神社宮司社宅庭園、松尾寺外園	

1964年	昭和39年	博物館明治村初代館長に就任 資生堂会館により第五回建築業協会賞受賞 『建築の造形』 展覧会 現代の眼「暮らしの中の日本の美」会場構成、慶應義塾幼稚舎講堂、名古屋大学古川図書館、室生屋星文学碑、湘南ヨットハーバー	『日本の庭園』	
1965年	昭和40年	博物館明治村開館 東京工業大学定年退官 名誉教授となる 乗泉寺、良寛記念館、政宗白鳥文学碑、尾崎士郎墓所	大阪府文化財専門委員	堀口捨己『庭園と空間構成の伝統』
1966年	昭和41年	帝国劇場 ロビー・客席、山種美術館、出光美術館	奈良都市計画地方審議会委員 『小堀遠州の作事』	
1967年	昭和42年	谷口吉郎建築設計事務所設立 明治村茶会運営委員会委員長 名鉄バスターミナル	奈良国立文化財研究所退職 史跡観自在王院整備専門委員会 委員 社団法人日本観光協会専門委員 『小堀遠州』（人物叢書140） 『桂離宮』 橿原神宮文華殿庭園、慈光院新書院庭園	対談「建築と造園の対話」（『ひろば』7月号）西澤が森に対談参加を依頼 西澤文隆 建築と庭園の関係を究明すべく実測開始
1968年	昭和43年	文化庁文化財保護審議会委員 帝国劇場により第九回建築業協会賞受賞 『東宮御所 建築・美術・庭園』 東大寺図書館、東京国立博物館東洋館、淡交ビルヂング、平和塔（ピース・パゴダ）、日本モンキーセンター栗栖研究所	庭園文化研究所設立 奈良国立文化財研究所調査員 桜井寺庭園	
1969年	昭和44年	名鉄バスターミナルにより中部建築賞受賞 東京国立近代美術館、隅外遺言碑、小説徳川家康記念碑、文学者之墓、柿雨 晔席、東宝ツインタワービル外装	日本万国博覧協会日本庭園委員会委員 『庭園とその建物』（日本の美術34） 矢田寺大門坊露地、郡山城跡市民文化会館庭園、和久伝旅館庭園、海眼寺庭園	堀口捨己 如庵移築
1970年	昭和45年	柿雨 椅子席、志賀直哉赤城文学碑、茶道研修会館、第二淡交ビル	日本造園学会賞受賞 『桂離宮他日本庭園史に関する一連の研究』 滋賀県文化財保護審議会委員 奈良市史編集審議会専門委員 『住宅庭園・茶庭－空間とデザイン』	
1971年	昭和46年	硫黄島戦没者の碑、ホテルオークラ・アムステルダム ロビー、中山義秀文学碑、八王子乗泉寺霊園、東京會館、清水家墓所、第四高等学校寮歌記念碑（北の都の碑）、放送功労者顕彰碑（しあわせの像）、志賀直哉葬儀式場構成	千葉大学非常勤講師 『奈良を測る』 九品寺庭園	
1972年	昭和47年	河文 水かみの間、ホテルオークラ 九兵衛・山里、亀井勝一郎墓碑	史跡白水阿弥陀堂境域復元整備委員会委員 『桂離宮』（日本の美術79） 講御堂寺庭園、延命寺庭園、粉河寺本坊庭園	
1973年	昭和48年	文化功労者となり文化勲章受賞 比島戦没者の碑、ホテルオークラ別館 ロビー、春日大社収蔵庫（宝物館）、石川県立中央公園噴水広場、吉田富三墓碑・シロネズミの碑、森鷗外遺言碑	和歌山県文化財保護審議会委員 『庭ひとすじ』	
1974年	昭和49年	『雪あかり日記』『建築に生きる』 中部太平洋戦没者の碑、迎賓館別館（遊心亭）、吉屋信子墓碑、日本学士会館、国立飛鳥資料館、佐藤春夫詩碑、新聞創刊の地記念碑	毎日出版文化賞受賞 『小堀遠州』 『日本の庭園』	堀口捨己『家と庭の空間構成』 『西澤文隆小論集1 コートハウス論』
1975年	昭和50年	山本和夫詩碑 『御所 離宮の庭3 修学院離宮』 『御所離宮の庭3 修学院離宮』文：谷口吉郎・森繭・村岡正、写真：遠藤崇	桂離宮整備懇話会委員 勲二等瑞宝章 『修学院離宮』（日本の美術112）	『西澤文隆小論集2 庭園論Ⅰ』
1976年	昭和51年	『坪庭』『博物館明治村』	史跡称名寺境内保存整備委員会委員 三重県文化財保護審議会委員 文化財保護審議会第三専門調査会専門委員	『西澤文隆小論集3 庭園論Ⅱ』 『西澤文隆小論集4 庭園論Ⅲ』
1978年	昭和53年	『建築と生活』		
1979年	昭和54年	『記念碑散歩』『続坪庭』『玄関の庭』 2月2日死去（享年74歳） 従三位勲一等瑞宝章追贈		
1980年	昭和55年		フランクフルト市バルメンガルテン植物園にて日本庭園史展開催（計画・設計を担当）	
1981年	昭和56年		特別名勝毛越寺庭園整備委員会委員 『庭園の旅』	『建築 NOTE 西澤文隆 伝統の合理主義』
1982年	昭和57年		京都市文化財保護審議会委員 名勝旧大乗院庭園保護管理委員会委員 和歌山城二の丸庭園	

1983年	昭和58年		和歌山市文化賞受賞	西澤文隆『日本庭園集成』全6巻（中村昌生と共著、～85年）
1984年	昭和59年		『日本庭園史話』（NHK ブックスカラー版15）	
1985年	昭和60年		薬師寺八幡院庭園	
1986年	昭和61年		『日本史小百科・庭園』 『「作庭記」の世界』 紫式部記念庭園	
1987年	昭和62年		上原敬二賞受賞	
1988年	昭和63年		死去（享年83歳）	

註

- 注1) 東京工業大学 1930 p.2によると、東京高等工業学校は1881（明治14）年に文部省による創設された東京職工学校が前身である。その後1890（明治23）年に東京工業学校と改称し、1901（明治34）年に東京高等工業学校と改称した。
- 注2) 東京工業大学 1930 p.3による。
- 注3) 東京工業大学 1930 pp.37-38, 71, 73, 78, 81, 83による。
- 注4) 東京工業大学 1931a p.75, 80による。
- 注5) 東京工業大学 1931c p.73, 84, 269, 275による。
- 注6) 東京工業大学 1932a p.74による。
- 注7) 東京工業大学 1936 p.76による。
- 注8) 東京工業大学 1939 p.58, 199による。
- 注9) 東京工業大学 1942 p.126による。
- 注10) 東京工業大学 1933b pp.127-128による。
- 注11) 谷口 1974 p.64による。
- 注12) 東京工業大学 1931c p.282、東京工業大学 1932a p.291、東京工業大学 1933a p.286に関連する研究の記述がある。
- 注13) 東京工業大学 1932a p.291、東京工業大学 1933a p.303に関連する研究の記述がある。
- 注14) 東京工業大学 1933a p.296に関連する研究の記述がある。
- 注15) 東京工業大学 1934 p.319、東京工業大学 1935 p.319に関連する研究の記述がある。
- 注16) 東京工業大学 1936 p.323、東京工業大学 1937 p.306、東京工業大学 1938 p.235、東京工業大学 1939 p.232、東京工業大学 1941 p.246に関連する研究の記述がある。
- 注17) 東京工業大学 1938 p.235、東京工業大学 1939 p.232、東京工業大学 1941 p.246に関連する研究の記述がある。
- 注18) 東京工業大学 1951 p.219による。
- 注19) 谷口 1974 p.83による。
- 注20) 森 1973 p.12による。このとき森は田村剛の造園学の講義について「そのはじめごろには日本庭園史をやるうなどとは思わず、洋行帰りの新知識のにじみ出る西洋庭園のあたりが一番おもしろく感じられた」としている。
- 注21) 森 1981 p.2による。当時の庭園について「当時は現今と違って御所、離宮はもちろんのこと、社寺拝観、ことに庭園の鑑賞者など全然なかったといった方がよい時代で、どこへ行ってもゆっくりと拝見できたし、所有者、管理者の方々からその由緒などいねいに説明していただけたのである」としている。
- 注22) 森 1973 p.23による。
- 注23) 森 1973 p.24による。
- 注24) 森 1973 p.21による。森 1971 p.11には関保之助にはじめて会ったのは昭和5年ごろとある。

- 注25) 森 1973 p.24による。
- 注26) 森 1971 p.15, 1973 p.34, 1981 p.18などに記述がある。
- 注27) 東京工業大学 1951 p.222による。
- 注28) 東京工業大学 1951 p.104による。森 1973 p.25にも記述がある。
- 注29) 森 1953によると、国立国会図書館関西館所蔵の森の学位請求論文は一部ページ数の修正が行われている。本稿では修正前のページ数で表記している。
- 注30) 谷口 1974 p.28, p.32, p.37に記述がある。
- 注31) 谷口 2015 p.61に「新大使館の庭に『日本庭園』を作ろうという計画が、日本にいる時に立案されていた。そのため、恩師伊東忠太先生のお指図に従って、その設計図を私は出発の間ぎわまで書いていた」とある。
- 注32) 谷口 2015 p.491に「ただ、残念なのは、恩師の伊東忠太教授からいろいろとご支持を受けていた日本庭園は、いろいろの事情によって完成することができなかった」とある。

参考文献

- 谷口吉郎他編 1942 『ギリシヤの文化』 谷口吉郎・村田潔 大澤築地書店 昭和17年
- 谷口吉郎 1948 『清らかな意匠』 朝日新聞社 昭和23年
- 谷口吉郎他 1953 「庭作と鑑賞」座談会『淡交』 1953（昭和28）年10月号
- 谷口吉郎他 1956a 『生活のなかの近代美術』 毎日新聞社 昭和31年
- 谷口吉郎他 1956b 『修学院離宮』 本文 谷口吉郎・写真 佐藤辰三 毎日新聞社 昭和31年
- 谷口吉郎編 1956 『みんなの住い』 河出書房 昭和31年
- 谷口吉郎 1957a 『日本の住宅』 講談社版アートブックス 大日本雄弁会講談社 昭和32年
- 谷口吉郎 1957b 「現代の庭」『芸術新潮』 1957（昭和32）年10月号
- 谷口吉郎他 1958 「伝統と新しさ その1 茶の湯を語る夕」『婦人之友』 1958（昭和33）年1月号
- 谷口吉郎他 1962 『修学院離宮』 本文：谷口吉郎 写真：佐藤辰三 淡交新社 昭和37年
- 谷口吉郎編 1964 『建築の造形』 毎日新聞社 昭和39年
- 谷口吉郎 1974 『建築に生きる』 日本経済新聞社 昭和49年
- 谷口吉郎・森蘊他 1975 『御所離宮の庭3 修学院離宮』 文：谷口吉郎・森蘊・村岡正 写真：遠藤崇 世界文化社 昭和50年
- 谷口吉郎他 1978 『建築と生活』 科学随筆文庫37 学生社 昭和53年
- 谷口吉郎 2015 『雪あかり日記／せせらぎ日記』 中公文庫 中央公論新社 平成27年12月20日
- 東京工業大学 1930 『東京工業大学一覧 自昭和四年至昭和五年』 昭和5年2月20日
- 東京工業大学 1931a 『東京工業大学一覧 自昭和五年至昭和六年』 昭和6年3月1日
- 東京工業大学 1931b 『東京工業大学 教授要目』 昭和6年8月31日
- 東京工業大学 1931c 『東京工業大学一覧 自昭和六年至昭和七年』 昭和6年10月30日
- 東京工業大学 1932a 『東京工業大学一覧 自昭和七年至昭和八年』 昭和7年12月20日
- 東京工業大学 1932b 『昭和八年度 東京工業大学案内』 昭和7年12月25日
- 東京工業大学 1933a 『東京工業大学一覧 自昭和八年至昭和九年』 昭和8年11月10日
- 東京工業大学 1933b 『東京工業大学要覧』 昭和8年12月15日
- 東京工業大学 1934 『東京工業大学一覧 自昭和九年至昭和十年』 昭和9年11月15日
- 東京工業大学 1935 『東京工業大学一覧 自昭和十年至昭和十一年』 昭和10年11月5日
- 東京工業大学 1936 『東京工業大学一覧 自昭和十一年至昭和十二年』 昭和11年11月5日
- 東京工業大学 1937 『東京工業大学一覧 自昭和十二年至昭和十三年』 昭和12年11月30日
- 東京工業大学 1938 『東京工業大学一覧 自昭和十三年至昭和十四年』 昭和13年11月25日
- 東京工業大学 1939 『東京工業大学一覧 自昭和十四年至昭和十五年』 昭和14年11月25日

- 東京工業大学 1941 『東京工業大学一覧 自昭和十五年至昭和十六年』 昭和16年 3月31日
東京工業大学 1942 『東京工業大学一覧 自昭和十七年至昭和十八年』 昭和17年11月30日
東京工業大学 1951 『東京工業大学一覧 昭和25年度』 昭和26年 3月30日
藤岡洋保 1997 『合目的性を越えた意匠の世界 谷口吉郎自邸』 新建築社 平成 9年
堀口捨己 1952 『桂離宮』 毎日新聞社 昭和27年
森蘊 1950 『美しい庭園 ―鑑賞と造園―』 創元選書197 創元社 昭和25年
森蘊 1951 『桂離宮』 創元社 昭和26年
森蘊 1954 『修学院離宮の復原的研究』 奈良国立文化財研究所学報第二冊 養徳社 昭和34年
森蘊 1955a 『桂離宮』 東都文化出版 昭和30年
森蘊 1955b 『修学院離宮』 創元社 昭和30年
森蘊 1956 『新版 桂離宮』 創元社 昭和31年
森蘊 1957 『日本の庭園』 創元選書259 創元社 昭和32年
森蘊 1959 『中世庭園文化史』 奈良国立文化財研究所学報第六冊 昭和34年
森蘊他 1960 『日本の庭』 森蘊著 恒成一訓(写真) 朝日新聞社 昭和35年
森蘊 1971 『奈良を測る』 学生社 昭和46年
森蘊 1973 『庭ひとすじ』 学生社 昭和48年
森蘊 1981 『日本庭園史話』 NHK ブックスカラー版 日本放送出版協会 昭和56年
森蘊門下生一同 1989 『故森蘊先生著述作品目録(稿)』 自家版 平成元年

参考論文

- 齋藤英一郎 2006 「近代建築家による日本式庭園研究の系譜とその特徴 ―著作・雑誌にみる建築界と造園界の交流―」『日本庭園学会誌』 2006 (14-15), pp.15-22
田中栄治 2006 「雑誌『建築と社会』にみる戦前の関西の住宅 ―阪神間のモダニズム住宅 その2―」『神戸山手大学紀要』 第8号 pp.105-118
田中栄治 2007 「雑誌『住宅研究』にみる大正期関西の住宅 ―阪神間のモダニズム住宅 その3―」『神戸山手大学紀要』 第9号 pp.97-108
田中栄治 2009 「雑誌『新建築』にみる大正から昭和初期の関西の住宅 ―阪神間のモダニズム住宅 その4―」『神戸山手大学紀要』 第11号 pp.61-72
田中栄治 2012 「大正後期から昭和初期の関西の住宅における庭園の役割 ―阪神間のモダニズム住宅 その5―」『神戸山手大学紀要』 第14号 pp.33-55 2012.12.20
田中栄治 2013 「大正後期の住宅における庭園の役割 ―大屋霊城『庭本位の小住宅』より―」『神戸山手大学紀要』 第15号 pp.29-46 2013.12.20
田中栄治 2014 「昭和初期の住宅における建築と庭園 ―西川友孝『造庭建築』を中心に―」『神戸山手大学紀要』 第16号 pp.19-36 2014.12.20
田中栄治 2015 「住宅における建築と庭園 ―庭園研究者・造園家 森蘊と建築家 堀口捨己・西澤文隆―」『神戸山手大学紀要』 第17号 pp.9-40 2015.12.20
谷口吉郎 1938 「建築意匠学・序説」『建築雑誌』 vol.52 No.634 1938(昭和13)年 1月20日 pp.14-23
藤岡通夫他 1953 「森蘊氏提出学位請求論文審査報告」 藤岡通夫・谷口吉郎・加茂儀一 東京工業大学
前田松韻 1927a 「寝殿造りの考究(一)」『建築雑誌』 vol.41 No.491 1927(昭和2)年 1月号 pp.1-38
前田松韻 1927b 「寝殿造りの考究(二)」『建築雑誌』 vol.41 No.492 1927(昭和2)年 2月号 pp.105-141

- マレス・エマニュエル 2013 「日本庭園史と森蘊の業績 ―毛越寺庭園の復元・整備を通して―」『奈良文化財研究所紀要』 2013年 pp.38-39
- 森蘊 1953 『桂離宮の研究』 東京工業大学学位請求論文（博士論文） 昭和28年12月26日工学博士授与
- 森蘊 1983 「建築と庭園の結びつきを求めて」『建築雑誌』 vol.98 No.1211 1983（昭和58）年9月号 p.20